

冷泉家秘決

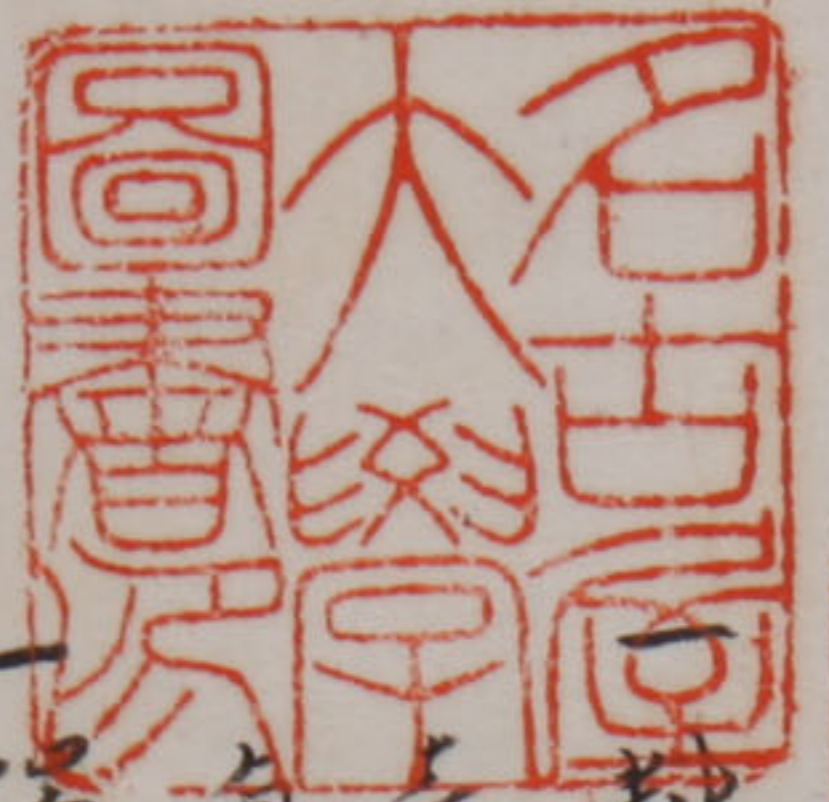
皇  
W 皇  
911.107  
R  
0

61439

911.107  
R



冷泉家秘決  
懷紙



一 料紙の中雁鳥檀紙又小雁鳥檀紙也此を天  
を寸以下を二寸五分を寸内宜を寸五分を寸加くと  
算強寸法も不物

一 端作季書、春、日、二、字、の、半、文、字、の、り、可、書  
夏、日、秋、日、冬、日、つ、り、て、書、こ、題、ハ、二、字、題、多、一、行、也  
か、く、一、字、題、ハ、和、款、の、字、一、行、の、下、へ、入、る、二、字、題、也  
一 和款を不來加  
一 和款名より長く書へ

一名神官たりハ多分位姓名の姓名和歌の字よりさ  
げて来へし

一歌三行三字之初初加右の文字并二行ハ十文字并

三行ハ九文字并四行三字 五葉假名ヲ用へし 右三十一字の

文字割之二十三字又及右、并二行ヲ十一字ニ十三字

ニ七の字又月花 神ありの文字結句の末は何れを

并四行の三字ヲ四字りて月花並 神加多

字乃花並初加くこ

一端作ノ字サ紙ノ端ノ明ヲ程案紙ハ右ハ加とて歌の

字サ端作よりハあけてニ者案紙乃も一奥の明ヲ

程ハ寸法紙の名ニ唐クハ二寸三寸あくともそま  
用へし地も名の事あるりハ歌の事あるへし

秋日詠水邊草花けるニ寸二分 秋日サハ紙ノ端ト名ノ半分

和歌 寸五分

従四位下度令正弘六分 従四位者出下ヨリ 寸四分

秋日詠水邊草花けるニ寸二分

秋日詠水邊草花けるニ寸二分

秋日詠水邊草花けるニ寸二分

秋日詠水邊草花けるニ寸二分

四行并寸二分宛

右大概也

短尺

一白紙

奉書  
の紙  
多子  
三寸七

折疊紙あても 墨を尺を寸八分幅を

寸八分 小切て用きて三折等分小折て花の字サ

本紙の如し但四文字五文字墨二折由書

山家

五月雨

逢

石舎志

如新之紙の字サ上ノ折目ヨリ

半字あけて書おすこ墨継葉紙のこくこ所継こ  
名ハあまり多きハふ道葉紙のこく

女高花

在これへうまろりこくもみゆ記うあける  
何是たる者小折を多れ也

正弘

詠草

名がササケケ

一杉系紙を用へしをちてもふ書控小折テ三折と三  
折し内五行はかくふハ二折一向之紙教ノ時何教も  
あつてきて書ゆるに閑るとなり書始ハ葉紙の如し  
書つゝら成り墨教とも一折の内由は折つゝこ  
名ノ下ノ上ノ字葉紙のこく

山崎の駒迎

逢さうぬを死の屋敷に  
つけよして今やひくくん  
とち月の駒  
河の坂乃せ死の岩の山  
ふこたうー山多ち也  
切もくれこま

けささをす一分  
正弘上 正中ヨリ少たへる

右依清許容口授之如き記し各に外學清他傳市  
口授ニ其筆以別ら懐紙あるも故傳小所人伝へち  
市口授筆しるす也

橋村白

新 白

丸墨白

清基

又返簡し内々清基文より了す

懐紙短人跡漢書抄より古志記し通し漢の  
格別し古事ニも乃、其名ノ口授あり入中其命以仍大  
概案紙注し以市不審ゆり其間も一、其以

候而存乃てハ難ク解人するも有し以て必以地江  
清浅語亦其用ニ成ル人多ク同門ニ多ク是レ也  
人別ニ軽ト多ク又傳ハ法度ニ在ル懐紙乃てハ  
所人乃てハ一子細乃てハ其詳容ハ左様ニ亦  
均等古也

右字保十八年丑七月四日し書面し

依清口換手宛の條々

懐紙

一春日詠水急草花

和歌

マニトラタ

右い加わうよふこいや 夏秋冬も春

曰くや也

一季書と下へ同ノ字書入るるも在るや

同字詠 堂上者 清制衣ありし時次ニ執柄竹園ホ  
し清詠一座し時同字ヲ、加ひ又當家 中将殿今  
宗通家 在る時 中將殿始地下ノ輩同字ヲ  
加ひ然そ一座し時宜ニ意ひるこ先ハ同字容易不可  
書加ひし

短尺

一上下の句首字つづく加ふる書又ハ二字在る者

二字在ニ文字ニて書了ハ不宣ト了後ハ序ヤ

世系強ク不拘ハ但修名の了了したる母子細文字  
の了了したる不ニ也

一 衆ノ書物清葉紙好見仕ルハ其申おるハ但左ハ少  
ら也て書了後ハ序ヤ

右三字形多てハ其申一形ニ也

四文字已上二行ニ修令 日初 初序 女言カ 隨風

松 五月雨 如此ハ之

詠草

一 何枚ト加さハハ序端ノ方ハ一二ニテモ附了後ハ序ヤ

二三附了ハ一向量ハ其のつかり事續ルハ宗近家

一 幾ハ何事終了ハ合点已後ハ切裁テ継立巻物

ハ指了て書了ト不終了して宣ハ候 是ハ而々

ノ作意ニ

右清田御し書物清葉紙好見仕ルハ其申おるハ但左ハ少

七月廿五

橋村正弘

西弘上

清基

清基詞宗

寅、四月、清汗客

夏日詠二首和款

正四位上春樹

新樹

つやと乃 志を憐のこ友り  
けりあくに 心こまけ 心ほろ  
みえ 次けりり

初恋

玉をた 鏡も 多吹く 心  
り 勢も けり けり けり けり  
こ 母 摘 けり

春日詠三首和款

従四位下文室言成

花

こや 戸 亦 乃 けり 志 志 志  
けり けり けり けり けり  
あ けり けり けり けり

無

そ けり けり けり けり  
玉 けり けり けり けり  
けり けり けり けり



松  
 夢福邊乃記子佐のえり母  
 ぼろの道をも今日と一むの  
 父まきつりり

一姓古和歌今多む板しものるえり

い子世世覚悟

一知進の和歌短冊通歌しはる歌をふ集徳々他  
 各家ノ出歌短冊あり長重ニ用ふ及来  
 いつれし日書の時あり歌ふらもくくかをいや又知進  
 而々治定ノ歌あり上登一人書て次下ノ人ふ及也 子細同方  
 本より歌をまきハ各別くや 但人ニ才之世子細

一人のしとくうきてつづい人歌のあして書短冊

の上へ来記いしめて送りゆくかきまの  
 各りつ詞書ハあてもり

右名正芳直うひ水下夜奉 弘小も  
 久氏

三月十九

一 詠みちかしれ入たるとるる

作曰 巻尾

お意して一 強うるいしく正連たる残力のあると  
ごうの古き古語の詞さとりて詠みハカ成借に  
とごうの外相カカをあらはするうらろし  
かろましくく

一 詠みちかしれ座右し書るる

作曰 巻尾

物やまうりめて正風カ叶ひと書上西の徳後  
撰るしめても新勅ハ手のとくくね取在し  
詠み大 概 中 風 神 曰 効 堪 徳 名 連 秀  
詠と在しと書秀詠ハいケ物 たらんやと詠み

時別秀詠神大畧し 抄出るる余る在之  
け詠の詠しゆゆ人幸

同

一 詠みカの入たるとるる地下よて徳を抄估  
在之と必書カの入たるとるるハ古き古語或  
ハ物語おの詞をとりて詠みたるをあらはす  
カとはさす出上下の詞のつゝさくかへんて  
詠みとごうの比又カトハ各別のるる中在しや  
抄して詠みちかしれいみちちえ風神のるる  
巻尾の物もけ詠い加やうたらをやうらまひ  
ごうや詠書ハ新勅撰集巻尾集 巻尾の詠

の新徳も平常熱い信方及人いかに  
多き程や妙なりも老若も清くのみ  
然る書作  
唐也

先度若上の御草に因

燃起

風光日々新

風光の心をくすくす

風光の心をくすくすの文をて日々に  
まをさる

唐の書柳

興考 一多くたすてすへの

引さぬくも古閑る学の新と書  
やれ

子乃山強

右返首 清言評し 新初心く 永々

光思弁の氣

風光 け 野芳 陽し 氣 培 書 心 心 書 所 也 たち  
雲 水 有 とも 日、 水 消 心 あり 何 と 何 と 何 と 何 と  
成 たる 新 又、 花 色 杜 柳 有 とも 何 と 何 と 何 と 何 と  
其 物 の 長 短 有 とも 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と  
野 意 又 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と  
有 とも 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と  
ら 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と  
柳 の 氣 とも 孫 とも 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と 何 と

二字を又一字にて是れ  
 考

四方の山陽の峯の麓のすぢにありて  
 考ありて、平を竟四方の山陽の  
 一字二つも耳かた、古同字なり  
 云々なる所もさして聞かん

同

一心何りての詞いさきき

詞もりてふ証詞よりや又

詞もりや

答

一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

一〇〇〇〇〇〇〇〇

一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

答

副歌 中川右近清基ヨリ

- 一 他し堂上方へ和歌正点、出歌の人遠き故難成り
- 一 和歌執心淺くて中途亦此其語難成り
- 一 石管故障ハ格別 此未言同疎畧有る者
- 一 右近心の上六試し奇多三是清基と内又客々進徳く上并客此在る者
- 右し類ニを親語く中ニ以別条有る者、  
 妙在右し類此味此成先試し歌多三是  
 清基と方との此老人進徳く上を量一俾は之

紀元岩橋仙洲ヨリ字事正弘ヨリ傳

初より門外入

冷白水様江 金戴石足 雑掌 中川氏、此亦多扇子料

重五

冷泉様江 何々々 不々々 多物 右近右ハ 扇子代派三々

一 身歌 一 暑氣足廻 一 歳暮 但暑氣足存兼テ  
 以上 一ヶ年三度く通達

一 詠中 題十 歌二十

題一ツニ 奇一首ハ等礼  
 歌一ツニ 奇二首宛ニ卷ニ

一 本式詠中 詠如草葉

一 十卷ト七奇歌多ハ卷ニシテ 二行中一然

同

一 五文百口参 多乃不淨邪念出不了人知  
和歌一云 宛証以他ノ付至當季ヲ云々入  
二 後人式雜ニ云 不若云々以式ノ指ニ拾合  
存了ノ存卒度ヲ宛証ノ

答  
如新証云當季ニ然ノ為至風情難求ノ  
海音ハ雜ニ歌ニ然ノ他ノ季母用ニ能

公妻清當座や  
东宮清所清會好

遠別名

後久々

月日さへ居て ぬ中子あふ坂のせうも亦非も  
右むの字こ 不及疑問カ  
けし証の心も旅たちた々々ハ國書非小部中手印て  
世途の世難シのこ初ア 修方由是ハ月日さへ  
隔てを色え一人ハ別也初旅たれハ國書  
非の意も由て國とも 類由々やうじと初りし  
うひ乃くあまつさへ遠くも口く是初やうも成た  
ハ國書非もくくこ々 名由是との由心て是按  
忍入手あハ初在由序ハ由宮親々下度人

久氏之狂問

一 翻野ノ短冊 三つ折上ノ折目処レ下ケテ書ト云ナ  
アリ下ケテ右ハ一カ一カ損シタル者ト云ナ用ユルコヘナラン  
汚名地下ノ輩草花悟ナリテ古又タルヘシ

久樹狂問

新古今集雜歌詞考ニ

此書垣ニ  
あれ文字の  
中々ホラコ  
又生記ル  
シ徒々ホラコ  
又 又説  
の具ヨウリ  
徒々ホラコ  
又 又ホラコ  
又 又ホラコ

さう一々あれてある分加きてたくお  
レあれてある分とハいケルレ  
るる諸集あるニ 然んども少抄物おも略ありし  
レ 抄本あかぬニ

あれハかかおても多おもても記おももレナリ 奇乃詞  
を徒マあるレトものおもてト

同集雜歌中

融院 位より多してふたを二子日あ

まひつらホまゆりて向したホをりつら

在あり方の人を只あるハきの北へ小抄存せり

け奇いケ拙し心ニト云

け奇い意味可涼道業雜及

ある撰集雜ア四季ノ奇非紙の奇ホ

多く入る雜のアよハ何色の奇ト入るるニト云

極々春秋の奇ニ可入奇も在し拙ニ云

或ハ雜ア又四季ヲ立ててもおらん入るコト云

ホシ 類義度の

たゞハ難し 點々々 當季ヲらみー心より  
難の心あり人(古四季) 非難もてモ 難めて  
拾遺集ハ難の去秋志賀ヲたてり迄の

右ノ條 蒙正教度の如ク

二月

中川清基撰

う 清久樹

寛保二癸亥年極月

以別書了上の先以今命名所<sup>ナリ</sup>至<sup>ル</sup>迄<sup>ニ</sup> 意物何れモ  
心掛ケ了のり 追々集本方<sup>ナリ</sup> 右と<sup>シ</sup>了の 執史  
志<sup>ス</sup>入<sup>リ</sup>玉谷志郡 涌列<sup>シ</sup> 砂石貯<sup>ル</sup> 重々<sup>ト</sup>付<sup>ル</sup> 少<sup>ク</sup>  
入<sup>リ</sup>言<sup>フ</sup> 暁人答志ハ二見浦也 想<sup>フ</sup> 伊勢浦<sup>ニ</sup>  
續キ<sup>テ</sup> 以<sup>テ</sup> 海也<sup>ニ</sup> 三々<sup>ト</sup> 當<sup>ル</sup> 時<sup>ニ</sup> 志<sup>ス</sup> 見<sup>ル</sup> 多<sup>ク</sup> 好<sup>ク</sup> 領<sup>ル</sup>  
介<sup>シ</sup> 他<sup>ニ</sup> 出<sup>ル</sup> 了<sup>リ</sup> 了<sup>リ</sup> 了<sup>リ</sup> 止<sup>ム</sup> 容<sup>易</sup> 難<sup>シ</sup> 求<sup>ル</sup> 世<sup>ニ</sup>  
一宰府能梅ノ本傳本<sup>ノ</sup> 持<sup>ル</sup> 世<sup>ニ</sup> 竹<sup>ノ</sup> 是<sup>レ</sup> 又  
入<sup>リ</sup> 言<sup>フ</sup> 世<sup>ニ</sup>

一女懐紙しり 唐拍一かき ちりー ちりー



一 女 三 分 懐 紙 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
一 女 三 分 懐 紙 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
又 一 女 三 分 懐 紙 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
右 二 分 條 何 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記

一 女 三 分 懐 紙 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
又 一 女 三 分 懐 紙 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
右 二 分 條 何 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記

上 都 之 書 改 之 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
一 女 三 分 懐 紙 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
又 一 女 三 分 懐 紙 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
右 二 分 條 何 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記

月 日  
清 基 雅 君

齋 起

一 女 三 分 懐 紙 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
又 一 女 三 分 懐 紙 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記  
右 二 分 條 何 之 子 記 述 存 一 句 簿 宗 傳 之 子 記

不致致許容トハ後ハ了入以古授与母ト有  
二 以屋の

一女高麗のそりとりする者ヲ以女ニ云々へて  
詠事々々情なめくうしりやうと云々との詞  
と在くハ不冷風情ある姿折たひく事と  
たしとヲ鬻中おもひら也たる詞と致是悟の  
娼ノ字ヲくぬると訓ハ又祿さむとも訓ハカ  
只治めよと有りて詞ヲ後たらしめし  
以上ノ二名味是悟不化ハ



右一冊或家以秘書写之平

寶曆十二壬午年初夏中旬以藤原有親家珎



